

# Asia Indicators

発表日: 2023 年 10 月 13 日(金)

台湾の輸出額は 13 ヶ月ぶりに前年を上回る (Asia Weekly(10/9~10/13))

～食料品とエネルギーの物価上昇一服でインドのインフレ率は3ヶ月ぶりに目標域に回帰～

第一生命経済研究所 経済調査部

主席エコノミスト 西濱 徹 (TEL: 03-5221-4522/050-5474-7495)

## ○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
10/10(火)	( <a href="#">フィリピン</a> ) 8 月輸出(前年比)	+4.2%	--	▲0.9%
	8 月輸入(前年比)	▲13.1%	--	▲15.2%
10/11(水)	( <a href="#">台湾</a> ) 9 月輸出(前年比)	+3.4%	▲3.0%	▲7.3%
	9 月輸入(前年比)	▲12.2%	▲14.2%	▲23.0%
10/12(木)	( <a href="#">マレーシア</a> ) 8 月鉱工業生産(前年比)	▲0.3%	▲1.2%	+0.7%
	( <a href="#">インド</a> ) 8 月鉱工業生産(前年比)	+10.3%	+9.0%	+6.0%
	9 月消費者物価(前年比)	+5.0%	+5.5%	+6.8%
10/13(金)	( <a href="#">シンガポール</a> ) 7-9 月実質 GDP(前年比・速報値)	+0.7%	+0.4%	+0.5%
	( <a href="#">韓国</a> ) 9 月失業率(季調済)	2.6%	--	2.4%
	(中国) 9 月消費者物価(前年比)	+0.0%	+0.2%	+0.1%
	9 月生産者物価(前年比)	▲2.5%	▲2.4%	▲3.0%
	9 月輸出(前年比)	▲6.2%	▲7.6%	▲8.8%
	9 月輸入(前年比)	▲6.2%	▲6.0%	▲7.3%

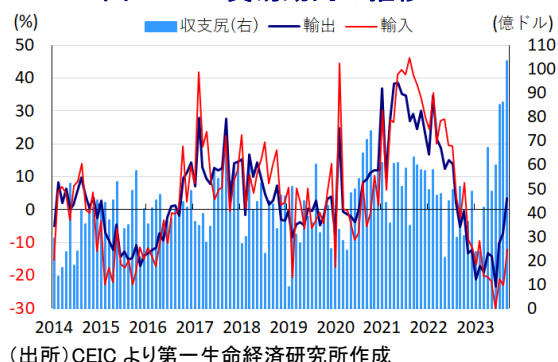
(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

## 【台湾】～欧米など主要国向けを中心に輸出の底入れが進み、輸出額は 13 ヶ月ぶりに前年を上回る伸びへ～

11 日に発表された 9 月の輸出額は前年同月比+3.4%となり、前月(同▲7.3%)から 13 ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じている。前月比も+7.0%と前月(▲4.6%)から 2 ヶ月ぶりの拡大に転じている上、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど底入れの動きを強めている。財別では、金属関連の輸出は引き続き弱含む展開が続くものの、主力の輸出財である半導体をはじめとする電子部品関連の輸出が拡大しているほか、化学製品関連の輸出が大きく押し上げられるなど、幅広い分野で輸出が底入れの動きを強めている様子が見えてくる。国・地域別では、最大の輸出相手である中国本土向けは引き続き力強さを欠く推移が続いているほか、日本向けも弱含む展開が続く一方、アジア新興国向けに底堅い動きがみられるほか、米国や欧州など先進国向けの堅調さが輸出全体を押し上げている。一方の輸入額は前年同月比▲12.2%と 11 ヶ月連続で前年を下回る伸びで推移しているものの、前月(同▲23.0%)からマイナス幅は縮小している。前月比も+2.7%と前月(同▲5.7%)から 2 ヶ月ぶりの拡大に転じている上、中期的な基調も拡大傾向に転じるなど底入れの動きを強めている。食料品関連や化学製品関連など幅広い分野で輸入に下押し圧力が掛かる展開が続く一方、機械製品関連や金属関連の輸入が底打ちしている

ことに加え、商品市況の底入れの動きも輸入額を押し上げている。結果、貿易収支は+103.24億ドルと前月（+85.91億ドル）から黒字幅は拡大して単月ベースの黒字幅は過去最大となっている。

図1 TW 貿易動向の推移

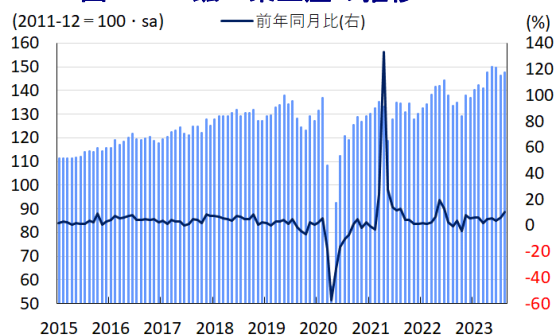


### [インド]～食料品やエネルギーの物価上昇一服を受け、インフレ率は3ヶ月ぶりにインフレ目標の範囲に回帰～

12日に発表された8月の鉱工業生産は前年同月比+10.3%となり、前月（同+6.0%）から加速して14ヶ月ぶりの高い伸びとなっている。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は3ヶ月ぶりの拡大に転じているものの、中期的な基調は減少傾向で推移しており、ここ数ヶ月に亘って頭打ちの流れが大きく変化する状況とはなっていない。分野別では、鉱業部門の生産に底打ち感が出る動きがみられる一方、製造業の生産は力強さを欠く展開が続くなど対照的な状況にある。こうした動きを反映して、一次産品や資本財関連の生産活動が底打ちする動きがみられるものの、中間財や消費財関連の生産は対照的に弱含む展開が続いている。なお、消費財のうち自動車など輸送用機械関連や電気機械関連など耐久消費財の生産は底打ちする一方、食料品や縫製品、木製品といった非耐久消費財の生産は弱含む推移が続いており、前年比の伸びの堅調さとは対照的な状況にあると捉えられる。

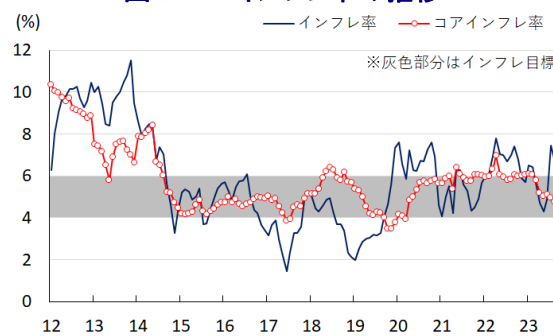
同日に発表された9月の消費者物価は前年同月比+5.0%となり、前月（同+6.8%）から鈍化して3ヶ月ぶりに中銀（インド準備銀行）が定めるインフレ目標（ $4 \pm 2\%$ ）の範囲内に収まっている。前月比も▲1.13%と前月（同▲0.05%）から2ヶ月連続で下落しており、原油をはじめとするエネルギー資源価格は底入れの動きを強めているものの、エネルギー価格が下落に転じているほか、過去数ヶ月に亘って大きく上振れしてきた野菜など生鮮品をはじめとする食料品価格も下落に転じるなど、生活必需品で物価上昇圧力が後退したことが影響している。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+4.53%と前月（同+4.79%）から鈍化する展開が続いている。前月比も+0.16%と前月（同+0.35%）から上昇ペースは鈍化しており、エネルギー価格の下落を反映した輸送コストの鈍化の動きを反映して幅広く財価格の上昇圧力が抑えられているほか、サービス物価の上昇ペースも鈍化しており、全般的にインフレ圧力が後退している様子がうかがえる。

図2 IN 鉱工業生産の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成, 季節調整値は当社試算

図3 IN インフレ率の推移

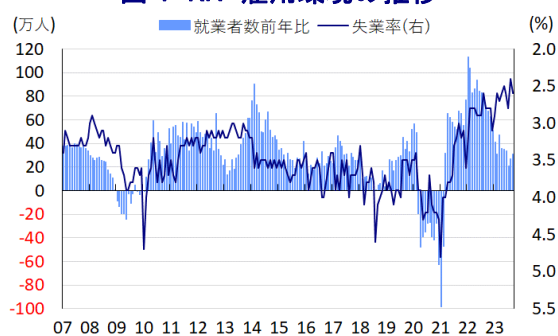


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

### [韓国]～高齢層の非正規雇用者を中心に雇用拡大が進む一方、若年層を取り巻く状況は依然厳しい展開～

13日に発表された9月の失業率(季調済)は2.6%となり、過去最低記録を更新した前月(2.4%)から0.2pt悪化している。失業者数は前月比+5.2万人と前月(同▲11.4万人)から2ヶ月ぶりの拡大に転じている上、年代別では10代以外のすべての年代で拡大する動きが確認されている。一方の雇用者数は前月比+2.8万人と前月(同+7.7万人)から2ヶ月連続で拡大しており、年代別では60代以上の高齢層を中心に拡大している一方、10代や20代の若年層や50代などで減少傾向が強まる動きがみられる。雇用形態別でも非正規雇用を中心に拡大する動きが確認されており、足下における雇用底入れの動きは高齢層の非正規雇用者がけん引役になっているものと捉えられる。なお、労働力人口は前月比+0.8万人と前月(同▲0.4万人)から4ヶ月ぶりの拡大に転じているものの、60代以上の高齢層による労働市場への回帰の動きがそのけん引役となっており、こうした動きを反映して労働参加率は64.4%と前月(64.2%)から+0.2pt上昇している。失業率こそ低水準で推移しているものの、その実態を巡っては若年層やいわゆる働き盛り世代を巡る雇用環境は依然として厳しい状況が続いていると捉えられる。

図4 KR 雇用環境の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

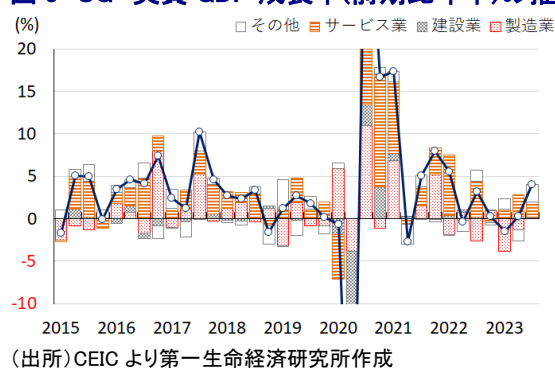
### [シンガポール]～サービス業を中心に景気底入れが進むなか、通貨庁は4会合連続で金融政策を据え置き～

13日に発表された7-9月の実質GDP成長率(速報値)は前年同期比+0.7%となり、前期(同+0.5%)から伸びが加速している。前期比年率ベースの成長率も+4.05%と前期(同+0.26%)から拡大ペースが加速している上、中期的な基調も拡大傾向で推移しており、足下の景気は底入れの動きを強めている。分野別の生産動向をみると、過去2四半期に亘ってマイナスで推移した製造業の生産はわずかにプラスに転じるも力強さを欠く推移が続いているほか、建設業の生産も弱含む展開が続く一方、イン

フレ鈍化や経済活動の正常化を追い風とする家計消費の底堅さに加え、国境再開による外国人観光客数の底入れを反映してサービス業の生産は堅調な推移をみせており、足下の景気を押し上げている。

また、同日にシンガポール通貨庁は定例の金融政策委員会を開催し、金融政策のツールである通貨S Gドルの名目実効為替レートの傾き（上昇率）を「実勢水準」に、中央値と幅を変更しないとして4会合連続で据え置く決定を行った。会合後に公表した声明文では、先行きの景気動向について「海外経済の見通しに対して同国景気の見通しは短期的に弱含むことが予想されるが、来年後半にかけて徐々に改善が見込まれる」との見通しを示している。なお、これまでは金融政策委員会を年2回（4月と10月）実施してきたものの、今後は年4回（1月、4月、7月、10月）に変更する方針を明らかにしており、国際金融市場を巡る不透明感が高まるなかで頻度を上げることで柔軟な政策対応を目指すものと見込まれる。

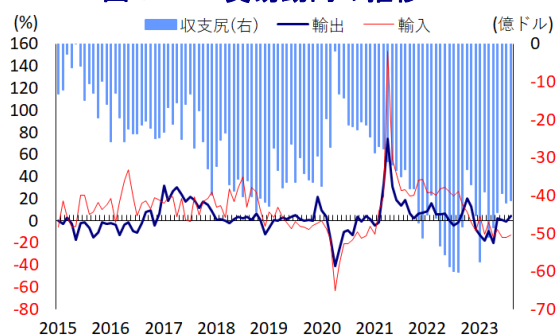
図5 SG 実質 GDP 成長率(前期比年率)の推移



### [フィリピン]～輸出入双方で底打ちの兆しも頭打ちの流れは変わらず、輸入は一段と力強さを欠く展開が続く～

10日に発表された8月の輸出額は前年同月比+4.2%となり、前月（同▲0.9%）から2ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じている。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は3ヶ月ぶりの拡大に転じるなど底打ちの動きが確認されているものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど頭打ちの流れが大きく変化するには至っていない。国・地域別では、最大の輸出相手である中国向けに底打ち感が出ているほか、米国向けや日本向けのみならず、ASEAN向けなど周辺国向けにも底打ち感が出る一方、景気の不透明感が高まっているEU向けは頭打ちの様相を強めている。財別でも、主力の輸出財である半導体をはじめとする電子部品関連に底打ち感が出ているものの、農産物や鉱物資源関連の輸出は力強さを欠く推移が続いている。一方の輸入額は前年同月比▲13.1%と7ヶ月連続で前年を下回る伸びで推移しているものの、前月（同▲15.2%）からマイナス幅は縮小している。前月比は3ヶ月ぶりの拡大に転じるなど輸出同様に底打ち感が出ているものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど力強さを欠く展開が続いている。商品市況の底入れの動きを反映して鉱物資源関連のほか、穀物など農産品関連の輸入額が押し上げられる一方、輸出に底打ち感が出ているにも拘らず電子部品関連の輸入は力強さを欠く推移をみせているほか、機械製品関連の輸入も同様に頭打ちの動きが続いている。結果、貿易収支は▲41.28億ドルと前月（▲41.99億ドル）からわずかに赤字幅が縮小している。

図6 PH 貿易動向の推移

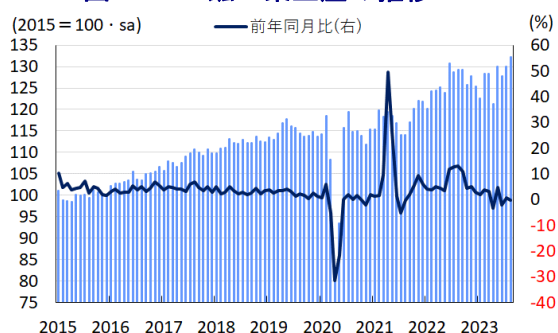


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

## [マレーシア]～製造業で生産底打ちの動きも、鉱業生産や発電量は弱含む展開が続くなど対照的な動きが続く～

12日に発表された8月の鉱工業生産は前年同月比▲0.3%となり、前月(同+0.7%)から2ヶ月ぶりに前年を下回る伸びに転じている。しかし、前月比は+1.74%と前月(同+1.66%)から2ヶ月連続で拡大している上、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど底入れの動きを強めている様子が見えてくる。分野別では、製造業の生産が底打ちしたことが全体を押し上げている一方、鉱業部門の生産は減少に転じるなど力強さを欠く展開が続いているほか、経済活動の動向に連動しやすい発電量も減少傾向が続くなど頭打ちの動きが続いている。鉱業部門については原油生産の低迷が全体の足を引っ張っている。製造業については、自動車をはじめとする輸送用機械関連のほか、木製品や食品加工など軽工業関連の生産に底堅い動きがみられる一方、主力の輸出財である半導体をはじめとする電子部品関連や金属関連、化学関連などで弱含む展開が続いており、対照的な動きがみられるなど跛行色が鮮明になっている。

図7 MY 鉱工業生産の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。